

昭和20年の故郷

学童集団疎開と毛呂山町



ここに一枚の写真があります。この写真は昭和19年に長栄寺（小田谷）で撮影された写真です。

昭和16年12月8日、日本はアメリカ、イギリスなどを相手に太平洋戦争をはじめました。しかし戦争が進むにつれ、戦局は悪化していき、昭和19年になると、日本本土への空襲も頻繁になるようになりました。東京への空襲が多くなっていたなか、当時の政府は、学童の集団疎開を閣議決定し、地方に親戚などがいる子どもは、「縁故疎開」を、親戚などがいない子どもは、教師に連れられ各地へと「集団疎開」をすることになりました。

毛呂山町でも、長栄寺（小田谷）と高福寺（滝ノ入）に昭和19年8月から昭和21年3月までの間、東京都日本橋区東華国民学校（現中央区立日本橋小学校）の児童が戦禍を避け、疎開してきました。

学童集団疎開

1926年12月26日、元号が昭和と改められました。その当時の日本は、経済恐慌や社会不安が続いており、政党政治に不満をもつ軍部が政治への干渉を強めていっていました。また学校では、明治23年に示された教育勅語の精神を基本理念として教育が進められていました。

昭和12年に日中戦争が勃発すると政府は、国民精神総動員運動を開始しました。戦時体制化が一気に進行したことで、学校における軍事教練の強化が進んでいきました。そして昭和16年に「国民学校令」が發布され、従来の小学校は国民学校に改称されました。

昭和16年に日本は、アメリカ、イギリスに宣戦布告をしました。昭和17年6月以降、戦局は一気に悪化しました。昭和18年には、「東京疎開計画」が決定され、大規模な空襲が現実のものとして捉えられるようになりまし。そして昭和19年には「一

般疎開実施要綱」が閣議決定され、東京都ではこれまでも勧奨してきた学童の縁故疎開を更に進めました。しかし、地方に縁故をもたない学童が多く、縁故疎開は思うようには進みませんでした。そこで「帝都学童集団疎開実施要領」が閣議決定され、東京都区部の国民学校3〜6年生の学童を対象に集団疎開を行うことになりました。

埼玉県では、神田区（現千代田区）、日本橋区・京橋区（現中央区）の学童を受け入れることになり、8月下旬から集団疎開が始まりました。疎開生活は、両親と離れて生活することになった幼い学童にとって辛いものであり、出発の日には、校庭で両親と涙を流して別れを惜しんだ児童もいたそうです。

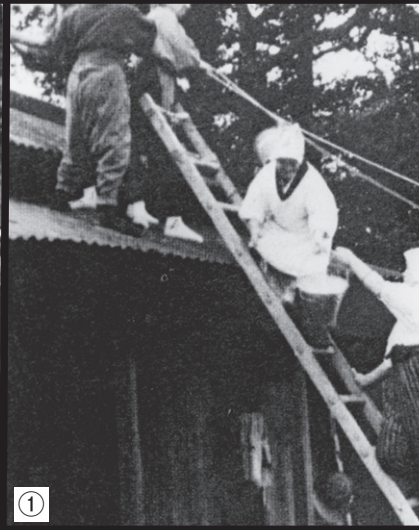
昭和20年、戦争が終結すると多くの児童が、親元へと帰りましたが、区域の約3分の2が被災した日本橋区は、翌年の3月まで疎開が延長されました。

年号	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年
教育・疎開に関する事項	4・1 国民学校令公布		11 定 「東京疎開計画」決定	3・3 「一般疎開促進要綱」閣議決定 「学童疎開促進要綱」 「帝都学童集団疎開実施要領」閣議決定	3上旬 東華国民学校6年生卒業進学のため疎開先から引き上げる 「学童集団疎開強化要綱」 国民学校初等科を除き学校授業を一年間停止 「戦時教育令」公布 東京都、集団疎開学童に帰校命令
戦局	12・8 太平洋戦争始まる	4・18 アメリカ軍機日本本土初空襲 6・5 ミッドウエー海戦敗北	2・1 ガダルカナル島撤退開始	1・8 「新防空法」実施 6 マリアナ沖海戦敗北 アメリカ軍サイパン島上陸 7 サイパン島陥落 11・24 サイパン島から爆撃機が東京を初空襲	3・10 東京大空襲 3・17 硫黄島日本軍全滅 4・1 アメリカ軍沖繩本島に上陸 6・23 アメリカ軍沖繩本島を占領 8・6 広島に原爆投下 8・9 長崎に原爆投下 8・14 熊谷空襲 8・15 太平洋戦争終わる

実情



②



①



④

①防空訓練 ②戦時教育6年生の武道
③兵隊ごっこ ④女子青年団軍事教練
⑤爆撃機に対してのバケツ消火訓練 ⑥愛国婦人会戦勝祈願
⑦米穀配給統制令下の米の配給



③



⑦



⑥



⑤

戦時中の毛呂山町

昭和12年に国民精神総動員運動が開始されると、戦争に備え、物資・生産・物価・労働など、ありとあらゆる分野にわたって、政府が強制的に統制措置を実施するようになりました。

こうして国民生活に必要な米などの食糧も配給の対象となり、人びとは、切符配給などによって窮屈な厳しい生活を強いられました。同時に食糧のほか軍事用の目的で多くの物が軍需資材として供出されました。また、地方自治体の下部組織として隣組などが結成されました。このころの地方自治体は、中央から委任された仕事は、無条件で行わなければならなかったため、新たな組織が結成されたことで、これまで以上に組織の統制が徹底され、結果、必然的に戦争に協力していく形になったのでした。

戦況の悪化に伴い、町民の生活も困窮していききました。食糧の受給困難が深刻になり、供出割当てでも一層厳さを増しました。また、戦地への召集によって労働力は減り、配給も減少してい

くようになってきました。

教育面では、昭和14年4月から青年学校は義務制となり、軍事教育的内容が優先され、入隊即実戦に役立つ訓練が要求されました。小学校は、昭和16年4月から国民学校と改称され、義務教育年限は初等科6年・高等科2年とされました。この地域においても山根尋常小学校は毛呂山国民学校西分教場、毛呂尋常小学校は毛呂山国民学校東分教場へと、また二葉尋常小学校は、川角国民学校へと名前が改められました。教育の方針は、国を背負って立つ小国民育成が主眼でした。

そのような状況下、昭和19年6月、「帝都学童集団疎開実施要領」を受け、東京都では、3、6年生の児童の学童集団疎開の準備が急ぎ進められていました。東京都教育局が行った集団疎開希望児童数調査に基づき、埼玉県には、神田区、日本橋区、京橋区の児童が疎開することになり、毛呂山町には、東京都日本橋区東華国民学校の児童が集団疎開してきました。

疎開児童の受け入れ



長栄寺 (小田谷)

集団疎開を受け入れたのは、先代の住職のころでした。先代自身も私に当時のことをあまり話さなかったので、多くのことは分かりませんが、疎開当初は風呂など施設が整っていませんでしたので、シラミなどが発生してたいへんだったと聞いています。また、食事の支度などは地元の人々の協力をいただき、まかっていたそうです。

このような弱者が犠牲になることが二度とおこらない世の中になつてほしいと思います。

(長栄寺 曾根脩一さん)



長栄寺での両親との面会日の写真 (昭和19年)

毛呂山町には、東華国民学校の児童155人が疎開してきました。そのうち長栄寺には、4年生の男女と6年生の男子100人、高福寺には、6年生の女子55人が疎開してきました。東華国民学校の児童は、そのほかにも大塚村(現坂戸市)の水源寺に5年生と6年生の男子約55人、越生町の越生館に3年生の男女と5年生の女子約80人が疎開しました。

昭和19年8月、親元から離れ、見知らぬ土地で暮らすという、子どもたちの不安な疎開生活が始まりました。しかし、当時の埼玉県知事が、空襲時における



高福寺 (滝ノ入)

当時、私はまだ幼かったので、集団疎開の意味も知らなかったのですが、気付いたら一緒に住んでいたという感じでした。

疎開した人のために作った炊事場が庫裡の横にあり、戦後もしばらくの間は残っていました。数年後不要になり、取り壊されたのですが、子ども心にも「さみしさ」を感じたものでした。

また数年後、当時の児童が何人か訪ねてきましたが、私のことを覚えていてくれて、嬉しく思いました。

(高福寺 萩原紀子さん)



高福寺での初めての面会日の写真 (昭和19年9月)

県下寺院の積極的協力などを表明していたこともあって、寺院関係者の集団疎開への対応は全体として好意的でした。また、他県よりも寺院での児童受け入れが多く、大部分が農村地帯であったこともあり、疎開児童たちにとって最も切実な問題であった食糧の面は、比較的恵まれていたといわれています。疎開児童に対する地元協力のぶりも概ね良好であったようでした。

毛呂山町でも長栄寺・高福寺関係者および近所の人たちが、食事のまかないや食糧の差し入れなど、さまざまな支援をしていました。

証言

疎開児童の生活

当初、疎開に行くことを、遠足に行くように感じていた子どもも少なくなかったようですが、戦時下であったため、送り出す親たちにとっては苦渋の決断でした。子どもの生活の不安だけでなく、場合によっては生き別れになってしまうのではないかと不安でいっぱいだったそうです。また、子どもたちも未知の土地に行く不安があったようで、なかには戦地に赴くような心もちで疎開先に向った子どももいたようです。

子どもたちは、食事や勉強など生活の大部分を疎開先の寺などで過ごしました。埼玉県では、疎開地の教育の場は都立国民学校の分教場と位置づけられたため、地元の学校に通学する子どもは少なかったようです。

毛呂山町においても疎開していた東華国民学校の児童は同様に、生活の場はそれぞれのお寺

毛呂山町の人には

本当にお世話になりました

やまなともこ
山名朋子さん

(神奈川県川崎市在住)

私が集団疎開で毛呂山の地を踏んだのは、昭和19年8月でした。当時は、背が高く1班で班長をしていました。疎開生活は、私個人としては、楽しく過ごせ

たと思います。先生の工夫や近所の人の協力のおかげで、食糧も当時としてはよかったです。少ないながらも終戦直後の何もない時代よりましでした。お寺の近所の人には、食事やお風呂といった生活の面だけでなく、農業の手伝いをさせてもらうな



稲刈りの手伝い第1班
(2列目右から3番目が山名さん)

ど貴重な経験をさせてもらいました。高福寺の田んぼで稲刈りをしたり、裏山で栗拾いをしたことは、楽しい思い出の一つとして今も覚えています。

「タマ吉通信」は父が、

私と長栄寺に疎開していた妹に宛てた手紙です。当時は、学童と親との手紙の行き来は厳しく検閲され、辛いとか寂しいなどという感傷的な言葉は好ましくないとされてきました。そんな

なか父は、家で飼っていた猫の言葉を借りて、父の心情や私たちへの気遣いを言葉にして手紙を送ってくれたのです。父は弁護士をしていたので、文章を書くのが得意でした。そのために機転が利いたのではないかと、今では感じています。この手紙は、戦禍のなか、ランドセルの中に大切にしまっていました。

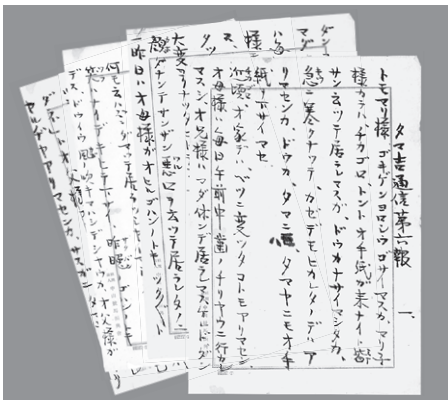
翌年の3月1日、高等女学校の受験のため帰京したのですが、帰京後わずか10日あまりで、東京大空襲に遭い家は全焼してしまいました。その後、叔父の家に家族全員で逃れましたが、程



山名朋子さん
(昭和19年8月下旬から昭和20年3月初旬まで高福寺で集団疎開を経験)

なくして叔父の家も空襲で焼け出されてしまったため、母の実家のある盛岡市に疎開しました。その後は、戦後の苦しい時代を乗り越え、今にいたります。

思えば、毛呂山町の人には本当にお世話になりました。食糧難の辛い時代ではありましたが、嫌な思いもせずにご過ごすことができました。



「タマ吉通信第六報」(原本の写し)



高等女学校受験のため高福寺を後にする児童
(昭和20年2月ごろ)

であり、ごく稀まれに地元の学校を借りて授業や運動した程度であったようです。また、食事の面に関しては、疎開してきた子どもたちにも不自由をさせないようにと、近所の農家の人たちから野菜などの差し入れもあったようで、それほど不自由はしなかったようです。

なかには、ホームシックにかかり、涙を流していた子どももいたようですが、毛呂山町に疎開してきた子どもたちは、概ね辛い思いをせずに疎開生活を送っていたと言われています。

毛呂山町は 私にとって 第二の故郷です

稲葉喜久子さん
いなばきくこ

(東京都東久留米市在住)

当初私は、神奈川県にある母の実家に縁故疎開をするつもりでした。しかし友だちの多くが集団疎開すると聞いて、毛呂山町に集団疎開することを決めました。

電車で揺られて八高線の毛呂駅で降りると、石がごろごろとした道。東京日本橋で育った私は、「これはすごい田舎いなかに来てしまった」と思いました。でも私は、疎開の生活が楽しくてしかたがありませんでした。夏の夜のお化け大会や畦道あぜみちでの鬼ごっこ、父



稲葉喜久子さん

(昭和19年8月下旬から昭和20年3月初旬まで高福寺で集団疎開を経験)

九一さんのことを親しみよこめてクイさんと呼んでいました。クイさんは、よくお寺の玄関を入ったところに腰をおろし、私たちに優しく「腹、すかなか」と微笑みかけてくれました。私たちに、それがとても嬉しく感じたものです。



稲刈りの手伝い第4班
(2列目左から4番目が稲葉さん)

毛呂山町で楽しく疎開生活をおくらせてもらいましたが、3月1日に帰京が決まると、やはり家族に会えること、また家族と暮らせることを思うと、とても嬉しかったものです。しかし帰京して間もなく東京はB29の大空襲に遭い、私たちの学校の近くも壊滅的な被害を被りました。幸い私の家は、焼かれずに残ったのですが、その後は母の実家に疎開して過ごすことになりました。

私は、常日ごろから「私には故郷が2つあります」と言っています。1つは私が生まれた日本橋人形町。そしてもう1つが私が健康に育つことのできた毛呂山町です。私たちのためにご尽力いただいた毛呂山町の人には、感謝の気持ちでいっぱいです。今を思えば、私は本当に毛呂山町に疎開をしてよかったと思っています。



「てのひらの記憶」

稲葉喜久子/文 東本つね/絵
(株)草土文化/発行

※「てのひらの記憶」は稲葉さんが戦時中の体験を著した絵本です。

毛呂山町での生活は、

その後の人生に大きな影響を与えました

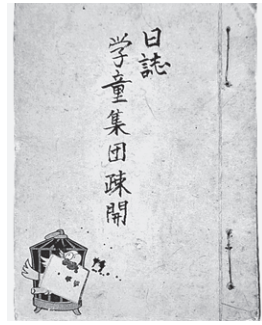
南部敏明さん
なんぶとしあき

(埼玉県寄居町在住)



当時、疎開児童が使用していた机（長栄寺蔵）

私が初めて疎開生活を行ったのは、小学3年生に進級する直前の昭和20年3月でした。それは東京大空襲から10日以上経った後でした。当時、私の家は杉並区にあったため直接の空襲被害はなかったのですが、疎開す



学童集団疎開の日記
(南部敏明さん蔵)

ることが決まり、親と離れ、ひとりで転校することに、何ともいえぬ不安を感じました。初めての疎開先は、長栄寺でした。それからおよそ10日後に大家村（現坂戸市）の永源寺に移りました。永源寺では、食糧が少なかつたことや、私自身幼かつたこともあって、辛かつた記憶しかありません。その後病

気で入院している時に終戦を向かえました。終戦後は、長栄寺、そして高福寺で昭和21年3月まで疎開生活をおくりました。

昭和21年4月から毛呂山国民学校（現毛呂山小学校）に通学し、毛呂山中学校1年生まで毛呂山町で暮らしました。

戦争が終わったことや親と一緒に暮らせることもあり、毛呂山町での生活は、疎開をしていたころも含め、とても楽しい日々を過ごしました。

友だちと山に遊びに行ったり、川に魚を獲りに行ったりしました。また流鏝馬や川角の獅子舞を見に行ったりもしました。



南部敏明さん
(昭和20年3月から昭和21年3月まで永源寺と長栄寺、高福寺で疎開生活を経験)

疎開をしているときは、それほど地元の人との交流はなかったのですが、実際に暮らすことをとおし、毛呂山町で自然を愛する気持ちを養うことができたと思います。そのことは、その後の私の人生に大きく影響を与えました。

今でも、私にとって毛呂山町は、「故郷」と呼べる場所です。

伝わっているのか

毛呂山町において、長栄寺と高福寺に疎開していた児童は、多くの人の協力もあって、比較的健やかな生活をおくっていました。当時、子どもたちの生活などを主に見ていたのは、引率の教師のほか、東京から付いて

いった寮母と呼ばれる人でした。しかしこれらの人だけでは人手が足りず、毛呂山町からも手伝いに行っていた人がいました。

疎開先の住職並びにそのご家族。そして、隣組長など近所の人。そのほかにも炊事などを手伝う地元動員の寮母もいました。

疎開していた子どもたちが、

今でも「お世話になった」と口を揃えて話す毛呂山町の人とは、どのような人であったのでしょうか。

ここでは、疎開していた子どもたちの世話をしていた地元毛呂山町の人たちのご家族に、当時の様子や内容がどこまで伝わっているかお話を伺いました。

検証





昭和45、46年ごろの長栄寺の遠景（松田太郎さん提供）

坂下ヨシ子さん（故人）

坂下ヨシ子さんは、長栄寺で疎開児童のために食糧の買い出しから、朝・昼・晩の食事の支度をしていました。

「実家が長栄寺の近所にあつたため、お寺で何か行事があると両親がお手伝いをしていた記憶があります。その関係で母は、疎開児童が来ていた時に、炊事のお手伝いをしていたのではないでしょうか。母は、昔のことをよく知っていて、料理がとても上手な人でした。」

話 坂下 均さん（小田谷）
（坂下ヨシ子さんの子）

高橋きみさん（故人）

高橋きみさんは、昭和19年8月末から10月半ばまで高福寺において、泊り込みで主に炊事の手伝いに行っていました。

「妻は、人に対して優しく、常に平等で面倒見のいい人でした。戦後になって、疎開していた人が何人か訪ねてきたことを今も覚えています。曲がったことがとにかく大嫌いで、私もよく叱られました。とにかく私にとつては、よくできた妻でした。」

話 高橋 寛二さん（毛呂本郷）
（高橋きみさんの夫）

岩上九一さん（故人）

岩上九一さんは、当時隣組長をしていたことに加え、自宅と高福寺が近かったことなどから、疎開児童たちの面倒を率先して見ていました。

「九一は、私の祖父になります。小柄な人で、農業を行っていたため、よく日焼けしていました。性格は、真面目で忍耐強く、いつもニコニコしている優しい祖父でした。私には、叱られた記憶がないぐらいです。疎開してきた人からもクイさん、クイさんと親しまれていたようです。」

祖父は、自分のことより、人のことを気にする人でした。冬場などの農閑期には、ちよつとしたアルバイトをして、私や妹に洋服を買ってくれたり、映画を見に連れて行ってくれたりしました。

そういった性格のため、隣組長として子どもたちの世話に對し、責任を感じていたのではないかと思います。しかしながら、本人にとつては、子どもたちと餅つきをしたり、話をしたりしていること自体を楽しんでしていたと聞いています。

平成13年に初めて、疎開していた人たちが、私の家を訪ねて



写真中央が岩上九一さん



岩上千恵子さん（滝ノ入）
（岩上九一さんの孫）

くれました。その時すでに祖父は亡くなっていたのですが、疎開をしていた皆さんから「今があるのは、クイさんがいてくれたおかげです。ひもじい思いをせずに済みました。本当に感謝をしています」と言われ、またある人からは「クイさんが生きていたときにお礼が言いたかった」と涙ながらに言われた時には、祖父の生きた証が鮮明に蘇り、本当に感激しました。

私は、心から岩上九一の孫として生まれたことを誇りに思っています。」

継承



日本橋小学校（東華小学校（国民学校）が統廃合され、日本橋小学校となる。現校舎はその後建て替えられた。）

人と人との助け合い

戦時下という、辛い時代背景のもと、空襲から逃れるために住み慣れた家を後にして、見知らぬ地に疎開してきた子どもたちは、不安を抱え、毛呂山の地に足を踏み入れました。その毛呂山町で出会ったのは、温かく迎えてくれた宿泊先のお寺の人や地元の人でした。

当時、食糧は非農家については、配給制であり、一人当たりの米や砂糖、マツチの本数まで決められていました。また、農家は供出（きょうしゅつ）といって農家の生産量の一定量を国に納めなければなりませんでした。農家といえども食糧に十分な余裕があるわけでもなく、また、労働力も不足していた時代でした。

疎開児童に対しても配給はありませんでしたが、食糧が不足しており、決して満足できる量ではなかったといわれています。しかし、地元の人たちは、限られた食糧のなかから、疎開児童たちの食べる分を捻出（ねんしゅつ）して、少しでも子どもたちがひもじい思いをしないようにと、サツマイモなどの差し入れをしてくれました。苦しい時代だからこそ助け合いがそこにあったのでしょう。

次代へ受け継ぐこと

東京都の学童集団疎開は、関東地方のほか東北や中部、北陸など15都県に約20万人規模で行われました。埼玉県にも約1万人が疎開してきました。埼玉県の特徴としては、寺院がその宿泊先として、多くあてられたことでした。受け入れ先は、農村部に多く、食糧事情がある程度恵まれていたことや、家族の住む東京都から近いという理由により、疎開してきた児童は、全国的に見れば比較的良好な生活をしてきたようです。

埼玉県では、現在にいたるまで疎開体験者と地元の人たちとの交流が続いている例が、複数あると聞きます。毛呂山町でも、疎開体験者が疎開時にお世話になったお寺やお宅を訪問する事例を聞いています。これは、疎開児童に対しての受け入れ側の厚い善意（こゝろよき）に起因（きん）しているものと考えられます。

苦しいときにこそ助け合うという精神は、いつの時代にも存在します。平成23年3月に発生した東日本大震災において、現在も被災地では、皆で助け合いながら、復興へ向けて頑張っています。また、埼玉県において

も旧騎西高校へと避難していた福島県双葉町の住民と県民やボランティアとの協力などがあげられます。

過去の事象は、過去だけのものではなく、現在にもあてはまることが多いものです。このような事象を現代へ、そして未来へと繋いでいくのも埼玉県平和資料館の務めであると考えます。

当館では、過去の資料の発掘と保存、未来に対してのメッセージの発信を行っています。今後も戦争の悲惨さと平和の尊さをもっと多くの人へ、そして特に若い世代へ発信することで、このような歴史を次代へ着実に受け継いでいきたいと考えています。

※埼玉県平和資料館は、10月中旬のリニューアルオープンまで、現在休館中です。



埼玉県平和資料館 石坂俊郎主幹

戦争という辛く苦しい時代がありました。家や家族を守るために人びとは助け合い、励まし合い生きてきました。

戦時中、毛呂山町に東京都の子どもたちが疎開していたことは、あまり知られていません。子どもたちは、もしかしたら二度と会うことができなかつたかもしれない状況下で、親元から離れ、戦禍を避けて毛呂山町で生活をしていました。

そのようななか、毛呂山町の人たちは、見ず知らずの子どもでもあるにもかかわらず、献身的に疎開児童たちの成長を見守ってきました。

太平洋戦争末期から終戦後にかけての数年は、我が国において、激動の年でした。昭和20年は、疎開してきた子どもたちにとっても激動の年であったに違いありません。それでも子どもたちの中には、短い疎開生活のなかにも、毛呂山町に「故郷」を感じていた子もいました。それはほかならぬ毛呂山町の人たちの温かい心に触れることができたからではないでしょうか。

過去、私たちの町にも苦しいときに支え合い、助け合って生きてきた時代がありました。しかし、先人たちが残してくれた記憶は決して過去だけのものではないのです。今を、そして未来を生きる人たちにとっても、それは貴重な記憶なのです。

【参考資料】『てのひらの記憶』稲葉喜久子・文 東本つね・絵、『私の学童集団疎開』南部敏明、『あゆみ創立70周年記念誌』中央区東華小学校、『東華開校六十五周年記念誌』創立六十五周年記念誌委員会、『中央区平和記念誌永遠の平和を願って』中央区地域振興部コミュニティ振興課、『中央区教育百年のあゆみ』東京都中央区教育委員会、『特別企画展学舎の子どもたち』埼玉県平和資料館、『毛呂山町史』毛呂山町、『新毛呂山町史』毛呂山町、『あの日、あの時をふりかえって』毛呂山町歴史民俗資料館

【協力】東京都中央区京橋図書館、東京都中央区日本橋小学校

特集

昭和20年の故郷

学童集団疎開と毛呂山町

(終)